

新 刊 紹 介

1931年度の英暦を見る

去る十月十六日、英國海軍省から1931年度の英國航海曆 Nautical Almanac が贈られて來た。採つて見て先づ其の重いのに驚いたが、英暦は二三年前から大に商買氣を起して、卷末に多くの廣告を載せてゐることを知つゝあるから、今度のも其のため紙數が重くなつて重いのかと最初は思つたが、中を開けて見て二度びつくりしたことは、全卷にわたつて未曾有の大變化が見付つたからである。曆に限らず、一般に英人は保守的で、英國品は古くからの形を尙ぶ習慣であるのに、今こゝに見る英暦の、思ひ切つた改革は何であるか？ 尤も、かつて「天界」第80號第481頁に記した通り、1931年度の英國曆には解説欄が附けられるといふことは豫め知つてゐたが、こんどの曆は全卷にわたつての、改革である！！

・英暦の本名は The Nautical Almanac and Astronomical Ephemeris といふのであるが、數年前から The Nautical Almanac の三語を特に大きく書く傾向であつた。こんどの1931年曆は此の傾向が一層鮮やかになつて、遂にタイトル・ページに THE NAUTICAL ALMANAC と初號活字で出てゐるのが先づ痛快である。

次いで、緒言 Preface の頁を開けると、まづ

『1931年度の Nautical Almanac は以前と比べてひどく其の内容が違つてゐる。其の重なる違ひは：一』

として、總計22ヶ條の項目が掲げてある。即ち

- (1) 毎日の基準時刻をグリニチ正午から0h(即ち夜半)に改めたヲ、
- (2) 日や月の豫報を毎月づつ一括せず、一年中を終始連續

- したヲ、
- (3) 赤緯は南北を廢して、大陸流に正負としたヲ、
 - (4) 同時に必要な數値を成るべく同所に並べたヲ、
 - (5) 計算器の利用者のため、對數と同時に眞數を掲げたヲ、
 - (6) 太陽の座標の原点を年初の平均春分点としたヲ、
 - (7) 理數家の利便のため、1950年頭の標準春分点で各遊星豫報を作つたヲ、
 - (8) 章動の單週期頁の表示を省いたヲ、
 - (9) 計算上の便利のため、毎日又は毎時の變化數値を多く入れたヲ、
 - (10) 測微觀測家のために、歲差章動アベラシオン等の微細な誤差表を作つたヲ、
 - (11) 南極星2個と、其の他24個の標準恒星を増したヲ、
 - (12) 日食地圖を便利よく縮少したヲ、
 - (13) 掩蔽豫報はグリニチだけでなく、エデンバラ、ケープ兩天文臺のも掲げたヲ、
 - (14) 太陽の物理表を毎日の表にしたヲ、
 - (15) 月の欠け際と、輝面の比率とを加へたヲ、
 - (16) 各遊星の物理表と衛星表とを一括したヲ、
 - (17) 木星面の本初子午線通過時刻の代りに、毎日0時の中央子午線の經度を記したヲ、
 - (18) 木星と土星の衛星に關する記事を増したヲ、
 - (19) 標準時表に、各地名のABC順の配列表を附加したヲ、
 - (20) 有用な表を増したヲ、
 - (21) 解説の項を書き改め、内容を増したヲ、
 - (22) 星の名や一般事項の索引を作つたヲ、

かうして徹底的な改革ぶりである。尙ほ、全卷にわたつて活字の撰擇や配置に注意を拂つて、大に數表界の模範たらんヲを期すといふ意氣込みである。

解説 Explanation の項は第734頁からであるが、最初の15頁は THE CALENDAR と顯して、曆なるものの歴史的な記述

がある。之れはオクスフォード大學のフオザリングガム Fotheringham 博士が書いたものであると、巻頭に断つてあるが、さすが見事な記事である。其れから次ぎに、時、分点、長期項と短期項、距離の單位、變化、といふ項目の記事があり、第753頁からは本航海曆の各項の内容についての親切な説明がある、又、第802頁からは Derivation であつて、本曆に用ゐてある多くの數値の準據が一々示してある。

第828頁からは附録 Appendi X で、全部が Interpolation と其の表との爲めに費され、

第860頁からは恒星の索引、

第864頁からは一般事項の總索引である。

堂々865頁を含む大冊であつて、殊に635頁以下は、一種の天文学教科書として、専門家も、通俗家も、學生も、總てが永く座右に具へるべきものと思ふ——之れが僅々3圓内外で買へるのは有難い話である。

1930年度の小遊星表

獨乙ベルリン市ダレム區の天文計算局から毎年一回 Kleine Planeten 「小遊星」と顯するパンフレットが發行される。元は之れがベルリン天文曆 Berliner Astronomisches Jahrbuch の中に組み入れられてあつたのだが、近年小遊星の新發見が激増するにつれ、ベルリン曆の中の多くの頁數を占領するようになったので、去る1917年度から遂に「小遊星」だけが獨立したパンフレットとして出版されることになつたのである。

ベルリンの天文計算局は目下全世界の小遊星に関する中央局であつて、ストラケ G. Starke 氏を主任とし、今や一千個に余る夥しい小遊星の軌道整理の總元締をやつてゐる。こゝに紹介するパンフレット「小遊星」は元來、毎年の小遊星の出現位置の豫報集であるのだが、しかし之れを見ると、小遊星學の最近の

進歩ぶりを最も鮮やかに見ることが出来る。

1930年度の「小遊星」は去る1929年十月五日に編輯され、すぐ印刷されたもので、去る十二月十九日、吾が京都へ贈られて来た。中は112頁にわたるもので、下の7部に分たれてゐる。

- (1) 1930年度の對衝の日附けと光度表
- (2) 對衝位置の豫報
- (3) 1930年内に於けるエロス星の概算位置表
- (4) 解説及軌道要素の變更
- (5) 觀測界の現況
- (6) 協力者
- (7) 正誤表

此れで見ると、今、小遊星として確定的な番號の與へられてゐるものが、總計1109個であつて、昨年より19個を増してゐる。このうち、220個は1930年中に對衝とならず、又、8個の小遊星は行衛不明となつてゐるため、合計228個を省いて、あと881個の對衝位置が掲げてある。其の位置は、對衝の日の前後約7週間にわたつて、10日毎の赤經と赤緯とを表示したものである。

行衛不明の8個の小遊星とは

星の番號		名	摘	要
155	シラ	Scylla	1875年に發見されたきり、	行衛不明
285	レジナ	Regina	1889年	ク　ク
330	アダルベルタ	Adalberta	1892年	ク　ク
392	キルヘルミナ	Wilhelmina	1894年	ク　ク
400	ドクロイザ	Ducrosa	1895年	ク　ク
452	ハミルトニア	Hamiltonia	1899年	ク　ク
473	ノリ	Nolli	1901年	ク　ク
515	アタリア	Athalia	1903年	ク　ク

さきに、50年ぶりで行衛が判明したエトラ星（第132）（「天界」第30號を見られよ）のやうな例もあるから、行衛が今不明であると言つても、失望するには當らない。

太陽視差決定のため、有名なエロス星（第433號）は1931年一月末に對衝となるのであるが、此の星の觀測は特に早くから始められるので、1930年十月一日から年末までの既算位置が毎

日、別表として、掲げられてある。

此の「小遊星」編輯のために、協力して計算を分擔した者は、ベルリンの計算局の人々のほかに、コペンハーゲン天文臺、レニングラド天文學院、ブルコフ天文臺、ミラノ天文臺、ソフィア大學天文學院、東京麻布天文臺、トリノ天文臺、其の他各地の十七氏である。

は が き

拜啓。其の後は御ぶさた致しましたが、御變り無きことと拜察申し上げます。小生、昨一日愈々下記の通り入隊致しましたから取り敢へず御報告申上ます。

昭和五年二月二日

廣島電信第二聯隊第一中隊

第一班 稻 葉 通 義

志願助手募集

當天文臺に於いて志願助手を若干名募集す。但し無給。男女を問はず。

勤務は晝間又は夜間（男子に限る）とし、期間は滿一箇年間。資格は中等學校卒業程度の學力を有し、天文同好會員にして、天文學の基礎智識と熱心なる好學心ある者たるを要す。希望者は履歷書を添へ、當天文臺に申込まるべし。

昭和五年二月十五日

花 山 天 文 臺